

小規模多機能型居宅介護「サービス評価」 総括表

法人名	(株)SNOW PLUM	代表者	毛利 友紀	法人・事業所の特徴	高齢者を始め、障害者等を対象とした福祉サービスを包括的に提供している。男性スタッフが多い、中国語やベトナム語を話すスタッフがいることなどが事業所の特徴である。
事業所名	PLUMの里	管理者	新谷 友美子		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	0人	0人	1人	1人	0人	1人	0人	2人	1人	6人

項目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価の確認	利用者一人ひとりの思いを全職員が理解できるよう、事例発表という形式で毎月ミーティングで実施する。	利用者担当制にしているため、各担当職員が利用者との関わりの中で見聞きしたことをまとめ、順次発表した。	発表後のフィードバックが大事と考える。 現在進行形といった取り組みである。	前回の取り組みで得た結果から、個別のニーズを引き出し、援助計画に落とせるようにする。
B. 事業所のしつらえ・環境	道路から見て直ぐにわかるよう案内を工夫する。	玄関までの通路に案内板、インターフォン横にも案内を取り付けた。	案内は意識していないとわからない。 敷地が細長く、建物の立地条件も関係している。	立地条件は変更不可能。看板も美観上の問題もあり変更は難しい。 案内をする時に、説明を工夫をする。
C. 事業所と地域のかかわり	事業所のある地域のふれあい喫茶参加継続と、事業所近くの商店と顔馴染みになり、事業所を案内する。	ふれあい喫茶の参加は継続でき、毎回5～6人が参加させてもらっている。近くの商店との交流は情報収集が甘く、実行できなかった。	運営推進会議の報告で努力していると判断する。 民生委員不在の地域もあり、民生委員自身も区割りが複雑と感じている。	地域の人に気軽に来てもらえる場所になるため、今年も事業所から出向き存在を知ってもらおう。参加できるふれあい喫茶をもう一箇所増やす。
D. 地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み	事業所にある地域だけでなく、利用者の住む地域のふれあい喫茶にも出向いてみる。	現在参加しているふれあい喫茶だけで、他の地域のふれあい喫茶の参加はできなかった。	一箇所でも行っているため、できていると判断します。 項目4で、心配だからと利用者以外のご近所に一方的に関わるのは無理があるのでは。	社会資源の理解が職員間で乏しいので、利用者を取り巻く社会資源をエコマップを作って理解することから始める。
E. 運営推進会議を活かした取組み	運営推進会議参加者が限られているので、地域の保育園、婦人会、老人会などにも案内し、地域に有効な情報を提供する。	保育園との交流は継続している。他の地域団体の活動情報を収集できず、実行できなかった。	参加者同士は情報交換の場となっている。 解散する地域団体が多い。	参加者と情報交換を継続するとともに、あんしんすこやかセンターから地域情報を収集する。
F. 事業所の防災・災害対策	近隣の人にも認知してもらうため消防署企画の「けむりの体験」に申し込む。事業所の防災計画を運営推進会議で発信する。	けむりの体験は抽選漏れだった。防災計画の発信をしないまま、防災訓練を実施してしまった。	消防署からは、地域の住民も巻き込んで訓練するよう言われるが、なかなかできるものではない。 マニュアル作成も限界がある。	地域に協力を求めることも想定してマニュアル、防災計画の見直しをする。 近隣に防災訓練の案内をする。